

① 次の文章を読んで後の問いに答えよ。

ちゃんど使い慣れた日本語があるのに、やたらと新しがつて外来語を使うことに私は賛成できない。しかしどう頭をひねっても、まだいくら工夫しても、日本語では何ともうまく表現できない概念や事物があることも事実である。私にとつてアイデンティティということばがその一つである。日常の話の中で、このことばを口にすると、私はいつもどのようににかならぬものかと思う。書く時はなおさらで、同じ外来語でもバターやコーヒーなどと書くことには何等の抵抗を感じないのに、アイデンティティだけは書くたびに、何とも落ち着かない気がする。でも日本語ではうまく言えないのである。その理由を考えてみると、結局は日本文化の中に、①アイデンティティという語で指示されるような、人間のもつ或る種の心理的特性が、全く欠如しているわけではないが、極めて稀薄な存在でしかないことに帰着する。どの民族にも、長い苛酷な歴史にもまれたことを示す②コク印として、文化、風俗、考え方の上での固有な特徴が見られる。自分はこれであつてあれではない。自分の文化や言語はこれこれしかじかの輪郭を持つが、他人のそれは全く違うといった自意識がはつきりしているとき、人は自分と同じ型の文化や言語をもつ人々との一体感を強く感じ、異文化集団に対して対立拮抗の関係にある存在としての自己を認識するようになる。水面上に石油を一滴たらすと限りなく拡がり、やがて薄い皮膜となつて見えなくなつてしまふ。ところが②サラダ油のようなネットリした油は、水に落としても拡散せず集まつたまま丸い粒となる。私の見るところ、ユーラシア大陸系の諸民族のあり方は、それぞれがまさに水面上に落としても拡散消滅することのない極めて粘性の強い油滴の性質を持つている。どれもが文化に関する明確な*自己定義をもち、強力な言語的*自己凝縮力で、他者とははつきり区別される自己を主張して止むことがない。ここでは、大きさも色合いも全く違う様々な油滴が、互いに混ざり合うことなく、相互に押し合いへし合う住み分けの状態にあると言える。文化的独自性という点では、日本民族も決してユーラシアの民族にひけをとらない。まして言語上の独自性ということになれば、これは日本人の固有特徴と言っても良いほどの、際立つた民族的属性である。ところがこの明確な民族的特質をそなえた日本文化全体と、同じく画然とした民族的固有性をもつ多くのユーラシア文化を比較してみると、そこには③対照的とも言える基本的な相違があることを見逃すことはできない。それは現在の日本文化がもつ固有性とは、物理的な諸条件によつて日本が他の国々から隔離されて来た結果として生まれ保持されて来たものであつて、他者、異文化と直接に競い合い、押し合うという淘汰選別の過程を経て形成されたものではないという点である。ここで再び油の喩えに戻るならば、日本文化はまさに粘性を欠く自己凝縮力の弱い石油だと言えよう。しかし水面上に落ちれば直ちに拡散し消滅する石油でも、水の上に適当な枠を浮かべてその中に落とせば、この枠内に留まつて、その範囲の中では独特の色合いを保持できるのだ。だがもしこの枠が何かの原因で取り去られるような事態になれば、自己凝縮力性を持たぬが故に、④キヨに拡散してしまふ。よく知られているように、我が国は古くは中国より、そして明治以後今に至る迄は西欧から、貪欲なまでに異文化を⑤セツ取し、古来の文化要素、固有の価値を次々と外国の⑥それに置き換えてきた。しかもこのことが、自己の破壊をもたらすどころか、かえつて⑦世界の驚異と目される発展につながつた。その秘密は、しばしば異文化の排斥、その結果として自己の進歩の停滞につながるこの多い強力な自己主張と凝縮性を日本人が持たぬがために、外来文化の輸入に対して抵抗が少なく、その反面物理的条件の故に自己拡散の危険に曝されずに済んだからである。だが昭和三十年代の後半に起こつた日本の経済的地位の上昇は、急速に進歩した世界の情報、交通手段の発達と絡んで、日本が二千年の長きにわたつて⑧キヨウ受してきた外的世界との物理的隔離の条件を完全に消滅させってしまった。

今や日本人は、異質の文化、異なる価値観と言語を持つ諸民族と、すべての面で直接に、⑨彼我を区別する枠なしで対峙せざるを得なくなつてゐる。自己と他者が同一の平面、全く同じ土俵の上にあり、⑩タクみな攻撃と有効な防禦によつてのみ生き残ることができる苛酷な競争の世界に引きずりだされた日本人が、はたして止めどなき自己拡散の道をたどるのか、それとも粘度の高い個性的な油滴として生き残れるかは、私達が強力な自己凝縮力性を持つアイデンティティをどこまで形成できるかの一点にかかつてゐるように思う。鈴木孝夫『ことばの社会学』による

*自己定義 自己を他と区別する意義
*自己凝縮力 他から切り離して自分だけで独立・自立する力

問一 傍線部⑨のカタカナを漢字に改めたものとして適当なものをそれぞれ①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ①刻 ②酷 ③克 ④告 ⑤去 ⑥居 ⑦虚 ⑧拳 ⑨甥 ⑩節 ⑪折 ⑫撰
⑬京 ⑭享 ⑮経 ⑯供 ⑰卓 ⑱琢 ⑲巧 ⑳拓

解答番号 ⑤

- 問一 傍線部①の説明として適当なものを後の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。
①強力な自我意識と独立心で、他者とははっきり区別される自己を意識する気持ち。
②ユーラシア大陸に住む白人でキリスト教徒の他の人種や宗教に対する優越感。
③常に変化し続ける文化、風俗、価値観に自分を調和させようとする意識。
④平穩に生業を続けるために地域の共同体や家族と仲良くしようとする意識。

問三 傍線部②の比喻が意図するものとして適当なものを後の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- 問一 何千年もの間互いに不倶戴天の敵として非難し合い、互いに抱き続けてきた他の宗教、他民族の文化への深い遺恨。
②自分たちの民族の文化への誇りを抱きつつも、外来の文化と調和させて新しい文化を進めようとする強い意欲。
③自分たちの民族の文化を最優秀だと信じ、異文化を劣悪だとして自分たちの文化で世界を統一しようとする民族意識。
④民族固有の文化への誇りを強く持ち、他民族とは融合しようとしないうラシアの各民族の文化に対する強い意識。

問四 傍線部③の説明として適当なものを後の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ①民族的固有性という点では共通だが、ユーラシア文化はそれぞれの民族固有の文化を他の民族と切磋琢磨して高めあつたのに対して、強い民族意識のない日本文化は古代から現代まで他民族の文化を模倣してきた結果である。
②民族的固有性という点では共通だが、ユーラシア文化はそれぞれが近隣の多様な文化と協調しながら今の文化を築いているのに対して、日本文化は島国であることと、三百年近く鎖国も続いたために西洋文明の発展から取り残された結果である。
③民族的固有性という点では共通だが、ユーラシア文化はそれぞれが近隣の多様な文化と対立し生き残つた結果であるのに対して、日本文化は地理的に大陸と隔絶され、鎖国も続いたために独立性・特殊性を保つてきた結果である。
④民族的固有性という点では共通だが、ユーラシア文化は紀元前から個人の人権を大切に文明を築き上げたのに対して、日本文化は古代から現代に至るまで個という意識がなく、常に集団の意思が優先されて創られた結果である。

問五 傍線部④が指すものとして適当なものを後の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ①文化的要素 ②文化的要素と価値観 ③価値観 ④欧米化

問六 傍線部⑤のように言われる理由として適当なものを後の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 ⑩

- ①伝統的文化や価値観を外国の文化に侵されても、寛容な日本人が柳に風と受け流して平然としている点。
②他の文化を受け入れても自国の文化の破壊・停滞につながらず、かえって文化・経済を発展させた点。
③文化的独自性という点で小さな島国の日本民族が決して大陸のユーラシアの民族にひけをとらない点。
④日本語の独自性は外国人にとって世界で類を見ない複雑さと難解さを兼ね備えていて学習しにくい点。

問七 傍線部⑤の説明として適当なものを後の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 11

-3-

①世界中に経済、軍事、宗教、文化などすべての面で争いが絶えない現代社会において、日本が民族として生き残るには国家・国民が精神的に団結しなければならぬ。

②世界はこれから民族や国家や宗教などの違いを超えて完全な自由往来ができるようになるので、異文化に

対して守りを固めないといつの間にか日本語もなくなってしまう。

③世界はすでにグローバルな時代であり、好むと好まざるとにかかわらず経済・文化・産業すべての面でポ

ーダーレスの時代を迎えていることを意識して世界と向き合わなければならない。

④超大国が世界の軍事、経済、文化を支配しようとして力で発展途上国を味方に付けようと争っているが、

宗教的なポリシーの弱い日本人もその争いの巻き添えになっている。

問八 コーヒーやバターなどと違って「アイデンティティ」という外来語には違和感がある理由として適当なも

のを後の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

①日本人は自分の文化や言語は異文化よりは優れているという意識が強く、これを守り通そうとする意識が

強いから。

②日本人は島国で生活してきているので異文化との協調性がなく、難しい外来語を受け入れる環境が整って

いないから。

③日本は島国で長く鎖国も続いたため、異文化をほとんど知らず、自国の文化に対して自意識がはつきりし

ているから。

④日本人は自分たちの文化や宗教を他民族と戦って守り通した経験がないため、民族の自意識が稀薄である

から。

二 次の文章を読んで後の問いに答えよ。

日本語の間という言葉にはいくつかの意味がある。まずひとつは空間的な間である。「すき間」「間取り」というときの間であるが、基本的には物と物とのあいだの何もない空間のことだ。絵画でも何も描かれていない部

分のことを余白というが、これも空間的な間である。

日本の家は本来、床と柱とそれをおおう屋根でできていて、壁というものが無い。これは部屋を細かく区分け

し、壁で仕切り、そのうえ鍵のかかる扉で密閉してしまいう西洋の家とは異なる。西洋の個人主義はこのよう個

室で組み立てられた家に住んできたからこそ生まれたというのとはよくわかる話である。

それでは、壁や扉で仕切る代わりに日本の家はどのようにするかというと、障子や襖や戸を立てる。「源氏物語絵

巻」などに描かれた王朝時代の⑥ギョウ延や貴族たちの屋敷を見ると、①その室内は板戸や部戸、襖や几帳な

どさまさまな間仕切りの建具で仕切られているものの、いざるところすき間だらけである。西洋の重⑦コナ

石や煉瓦や木の壁に比べると、何という軽やかさ、はかなさだろうか。

しかも、このような建具はすべて季節のめぐりとともに入れたりはずしたりできる。冬になれば寒さを防ぐた

めに立て、夏になれば涼を得るためにとりはずす。それだけでなく、住人の必要に応じて、ふだんは座敷、次の

間、居間と分けて使っている。いざ、大勢の客を迎えて祝宴を開くという段になると、すべてをつないで大広

間にすることもできる。このように②日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在にないだり切ったり

して暮らしてきた。

次に時間的な間がある。「間がある」「間を置く」というように、こちらは何もない時間のことである。芝居

や音楽では声や音のしない沈黙の時間のことを間という。

ベッパにしてもモーツァルトにしても西洋のクラシック音楽は次から次に生まれては消えてゆくさまざな音

によって埋め尽くされている。(A)「モーツァルトの『交響曲二十五番』などを聞いていると、息を③シ

ぐ暇もなく、ときには息苦しい。モーツァルトは沈黙を恐れ、音楽家である以上、一瞬たりとも音のない時間を

許すまいとする衝動に④カられているかのように見える。

(B)「日本古来の音楽は琴であれ笛であれ鼓であれ、音の絶え間というものがいたるところにあって長閑

なものだ。⑤その音の絶え間では松林を吹く風の音がふとよぎることあれば、谷川のせせらぎが聞こえてくる

こともあろう。ときには、この絶え間があまりにも長すぎて、一曲終わってしまったかと思つて、や

おら次の節がはじまるということも珍しくない。そんなふうに、いくつもの絶え間に断ち切られていても日本の

音楽は成り立っている。

空間的、時間的な間のほかにも、人やものごとのあいだにとる心理的な間というものもある。誰でも自分以外のひととのあいだに、(c) 相手が夫婦や家族や友人であっても長短さまざまな心理的な距離、間をとって暮らしている。このような心理的な間があつてはじめて日々の暮らしを円滑に運ぶことができる。

こうして日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。それを上手に使えば「間」に合う「間がいい」ということになり、逆に使い方を誤れば「間違い」、間に縮まりがなければ「間延び」、間を読めなければ「間抜け」になってしまう。間の使い方はこの国のもつとも基本的な掟であつて、④日本文化はまさに間の文化といふことができる。

では、この間は日本人の生活や文化の中でのどのような働きをしているのだろうか。そのもつとも重要な働きは異質なものの同士の対立をやわらげ、調和させ、共存させること、つまり、和を実現させることである。早い話、互いに意見の異なる二人を狭い部屋に押しこめておけば喧嘩になるだろう。しかし、二人のあいだに十分な間をとってやれば、互いに共存できるはずだ。狭い通路に一度に大勢の人々が殺⑥トウすれば、たちまち身動きがとれなくなつてパニックに陥つてしまうが、一人ずつ間遠に通してやれば何の問題も起らない。

和とは異質のものが同士の調和し、共存することだつた。この和が誕生するためにはならない土台が間なのである。和はこの間があつてはじめて成り立つということになる。

問一 傍線部③～⑥のカタカナを漢字に改めたものとして適当なものをそれぞれ①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ①絛 ②宮 ③給 ④旧 ⑤①高 ⑥濃 ⑦厚 ⑧幸 ⑨①垂 ⑩告 ⑪継 ⑫注
- ①駈 ②借 ③刈 ④苴 ⑤①倒 ⑥至 ⑦棟 ⑧到

問二 傍線部①の長所と欠点を記したものととして適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

- ①一族・家族の団結心が損なわれる反面、プライベシーが尊重されて個の独立心が培われる。
- ②一族・家族を中心にして協調・融和しようとする心が育つ反面、個人が尊重されない面がある。
- ③忍従を強いられて個人主義を基本にした生活が損なわれる反面、精神的な忍耐力が培われる。
- ④日本特有の季節感を味わうことができる構造になつてゐる反面、主人による支配ができにくい。

問三 傍線部②の説明として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

①日本人は住居の空間を臨機応変に仕切ることで、年間の寒暖にも、一族の行事から個人の生活にも自在に対応してきた。

②家の中の空間を自在に仕切ることで夏の暑さにも対応でき、身分・立場の差が明確に出るような仕組みにもしてきた。

③日本では古来住居の空間を壁で仕切らないことで一族・家族内に秘密が持たれないようにして家庭内の平穏を保つた。

④日本の家庭では陰湿ないじめや隠れた暴力が起こらないように、家屋には個室を設けず空間を仕切らない建築をしてきた。

問四 (A) (B) (C) に入る言葉の組み合わせとして適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

①Aたとえ B それにひきかえ C たとえ

②Aたとえ B それにひきかえ C それにひきかえ

③Aそれにひきかえ B たとえ C たとえ

④Aたとえ B たとえ C それにひきかえ

問五 傍線部③の説明として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

①日本の古典音楽は音を何度も断ち切ることで鑑賞者のイメージを次々と変化させ多様に展開させる。

②日本の古典音楽はいつ始まつていつ終わるか分からないので鑑賞することがとてもむずかしい。

③日本の古典音楽は常に音を出し続けて鑑賞する人に松風や小川のせせらぎなどをイメージさせる。

④日本の古典音楽は余韻をゆつくり味わつて心象風景を楽しむことができるようになっている。

問六 傍線部④の説明として適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 22

5-

- ①日本の文化は、村や一族や家族などの共同体を中心とし、個を大切にしない村落・家族協調の文化である。
②日本の文化は、物理的にも心理的にも他者との距離感を適切に保つことのできる協調融和の文化である。
③日本の文化は、芸術家・職人集団としての力は考慮に入らず、芸術家個人の力量を重視する文化である。
④日本の文化は、和歌、俳諧、音楽、絵画、舞踊などすべての芸術が自然と一体化している文化である。

問七 大問一と大問二の文章に共通して述べられていることとして適当なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

解答番号 23

- ①現在の混乱した世界情勢の中で、日本文化の特質を生かして働きかければ、他の民族同士の対立をやわらげ調和させて平和を実現させることができる。
②日本文化は異文化と適切な距離を保ちながら競い合い、切磋琢磨しながら異文化を拒絶したり乗り越えたりして、新しい日本文化の糧としていく。
③日本文化の特色は、異質なものに対して、自己を守ったり強く主張したりしないで、距離を適宜保ちながら受け入れて自らも進化していく点にある。
④日本は地理的に大陸と隔絶されたおかげで幕末までは文化的な独立を保っていたが、急に開国をしたため警戒心から異文化との距離を縮められないでいる。

三

次のA～Eの文の傍線部と同じ働きをそれぞれ後の①～④から選んで記号で答えよ。

解答番号 A 24 B 25 C 26 D 27 E 28

- A この力士は怪量ながら足腰が強くしかも多彩な技も持っている。
① 久々に帰郷したが昔ながらの山川の眺めは変わらない。
② 子供ながら道ばたに倒れた老人を助けて表彰された。
③ 山道を登りながら考えた。「とかくこの世は住みにくい」
④ 涙ながらに家庭のつらい事情を話してくれた。

B 風ばかりか雨までふってきた。

- ① そんなこと言うから子供にまで馬鹿にされるんだよ。
② 言うまでもなく飲酒運転をしてはならない。
③ 京都から博多まであなたを追って来ました。
④ 頑固なまで口をつぐんだままだ。

C 一度はけんか別れた友とまた仲良くなることができた。

- ① あなたとはぜひまたいつかお会いしたいものです。
② 彼は歌手でありまた作曲家でもある。
③ 「これはまたどういうことですか」
④ この作品も素晴らしいけど、こちらの作品もまた立派ですね。

D 砂漠のような都会で身を寄せ合って暮らす。

- ① 今説明したような理由があつて約束を果たせなかった。
② その会社は世間ではまだよく知られていないようだ。
③ 「あなたの言葉を忘れないようににしたいの」
④ 墨のような黒い雲が満月を隠す。

E 友達のところに今度は男の子が生まれたそうだ。

- ① 「そうだ、いいこと思いついたぞ」
② 彼女は紅葉の頃京都に行くそうだ。
③ 今年の紅葉は例年より早そうだ。
④ 桜島もそうだが、九州には活発な火山が多いね。

四

次のA～Gの慣用句・ことわざの意味として適当なものを後の①～⑨の中から選んで記号で答えよ。

- A 閑古鳥がなく B 虎になる C 馬脚をあらわす D 狐の嫁入り E 猫に小判 F 猫をかぶる G 犬の遠吠え
- ①不景気でさびしいさま ②日照り雨 ③非常に誠実なさま ④本性を隠して上品ぶるさま
- ⑤無知な者には真価がわからないさま ⑥酔っぱらう ⑦臆病者がかげで威張るさま
- ⑧追いつめられた弱者の逆襲 ⑨ばけの皮がはがれる

五

次のA～Gの意味となる三字熟語を後の①～⑨の中から選んで記号で答えよ。

- A 純粋で混じりがないこと B 後世に残る優れた業績 C 第三者や世間の評判 D 財を蓄えるのに執心するケチな人 E 死に際の苦痛 F 突破できれば出世できる難関 G 今までに一度も起こったことがないこと
- ①破天荒 ②断末魔 ③金字塔 ④守銭奴 ⑤登竜門 ⑥下馬評 ⑦未曾有 ⑧老婆心 ⑨生一本

六

次の文章の(A)～(G)の中に入る作家名を後の①～⑨の中から選んで記号で答えよ。

昭和二十年の敗戦の後、言論統制が解かれ、文壇にも活気が戻った。最初に旺盛な活動を開始したのは既成の作家たちであつた。永井荷風の『踊子』(A)の『細雪』、志賀直哉の『灰色の月』(B)の『千羽鶴』などが戦後の混乱期に、既成のモラルや文学観に反発して、虚無的・退廃的な態度の中に文学の意味を追究したのが、無頼派(新戯作派)と呼ばれた作家たちであつた。『斜陽』『人間失格』を書いた(C)、『白痴』『墮落論』を書いた坂口安吾、『夫婦善哉』の織田作之助などがそうである。

昭和二十一年に創刊された雑誌「近代文学」を中心に活躍した作家や評論家たちのことを第一次戦後派という。彼らは政治よりも人間を優位に置く文学を主張し、近代的な自我の確立を目指した。その代表作に(D)の『暗い絵』『真空地帯』『梅崎春生の『桜島』、椎名麟三の『深夜の酒宴』、埴谷雄高の『死霊』などがある。第一次戦後派に続いて登場した個性的な才能を持つ人たちは第二次戦後派と呼ぶ。『俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』などを書いた(E)、『仮面の告白』『金閣寺』『潮騒』などを書いた(F)、『壁』『砂の女』など前衛的な作品を書いた安部公房、『死の棘』の島尾敏雄などが挙げられる。

昭和二十七年、八年頃に登場してきた新人作家たちを山本健吉が第三の新人と命名した。彼らは観念的な世界よりも日常的な市民の世界を重視した。安岡章太郎は『悪い仲間』『海辺の光景』などを書き、吉行淳之介は『驟雨』『砂の上の植物群』などを著し、(G)は『海と毒薬』『沈黙』などを著した。

- ①三島由紀夫 ②遠藤周作 ③野間宏 ④太宰治 ⑤大岡昇平
- ⑥谷崎潤一郎 ⑦川端康成 ⑧泉鏡花 ⑨芥川龍之介